

Eureka XI

六年制通信 No.29 令和5年12月15日(金)号

今日の一針

始業式や終業式、あるいは学校説明会でもよく話すのですが、入学試験は時間との勝負です。大学入試、特に共通テストは問題文が無駄に長いので、じっくり読んでいては時間が無くなります。ですからスピードを意識して解答する必要があります。しかし、ああいうテストに慣れてしまうと、何でも適当に読んで目についた言葉を適当につなげて勝手に解釈し、想像力を駆使して答える、そんな癖がつかないかと心配しています。正解か不正解というより当たったか外れたかのゲームみたいな感覚で入試問題を解くなんて本来あってはならないのですが、作成される問題の劣化のせいでゲームに勝つコツをつかんだ方が受かりやすい、そんな風潮にならないかと心配しています。

どんな文章でも、心を豊かにしたり精神を鍛えたりするためには、本当は時間をかけてじっくり読む必要があります。小林秀雄が「どんな文章でも簡単な文章なんてない。簡単だというのならそれは君が簡単に読んでいただけだ」と言っていました。確かにその通りですね。ですから若いうちにじっくり読むことを学ぶべきなのですが、ザッと読む、斜めに読む、大意をつかめばよしという、一種の速読ですね、そちらばかりに気を取られてはいませんか。じっくり読む孤独の時間を持って下さいね。

さて、時間のことについては私たちはずいぶんと工夫された言葉を持っています。やはり昔から時間については頭を悩ませてきたのでしょうね。何でも慌てて急いで事を運ぶと必ず良くない結果になる、そのことを戒めた諺もたくさんあります。先日NHKの「チョコちゃん…」をボーっと観ていたら「急がば回れ」の、回れとはどこの話なのかという問題が出ていまして、何と琵琶湖のことだったのです。知りませんでした。琵琶湖を船で渡るのは橋（瀬田の唐橋ね）を徒歩で行くより近道ですが、穏やかそうに見える湖も強風に荒れて船が出ないことがあるそうなのです。それで、本当に急いでいるなら確実に通れるルートを選べという意味の「急がば回れ」が生まれたというお話。なるほど。急ぎの用事だからこそ間違えないようにというのは、正しい心構えですね。阿川弘之の『大人の見識』の「序にかえて」に幕末の外国奉行川路聖謨のエピソードが紹介されています。この字で（としあきら）と読みます。中野好夫は『伝記文学の面白さ』（岩波書店 同時代ライブラリー）でこの人を取り上げ「日本初の国際的外交家」と評しています。川路はよく部下に「これは急ぎの御用だからゆっくりやってくれ」と言っていたそうです。これも、急ぎの用というのは常に重要事項ですから、万が一にも間違いのないように慎重に行え、ということでしょう。西洋には古くからラテン語の *festina lente* という言葉があって、開高健なども好んで使っていますが「悠々

として急げ」という意味です。「急がば回れ」を反対から言ったような感じですね。

あるいは、そもそも慌てなくていいようにすればいいわけで、つまり「転ばぬ先の杖」ですが、これにも面白い諺があります。「今日の一針明日の十針」ですが、意味は分かりますよね。私はこの「明日」は普通「あす」なのでしょうが「あした」と読んだ方が語呂がいいように思うのでそう発音しています。「きょうのひとはりあしたのとはり」ね。英語では **A stitch in time saves nine.** ですが、これは英語の方が先にあったのだと思います。どなたが訳したのか知りませんが日本語も素晴らしいですね。翻訳のお手本みたいです。英語を直訳すると「適切なときに一針縫っておけば九針分の手間が省ける」ですから、この意を汲んだ上で日本語らしく訳しています。うまいよね。

教育現場では、おそらくほとんどの先生方が **The sooner, the better.** で一致することがあります。それは例えば自己推薦書などの提出期限内で生徒がいつ提出してくるかという話です。来週いっぱい（月～金）が提出期限だとして、月曜日に提出する生徒はまず書類にミスをしていません。ギリギリに持ってくる生徒の書類にはミスが多い。これは先生方の誰もが経験することだと思います。明日郵送しなくてはならない書類にミスがある、しかも前日の夕方にそれが見つかる、私も何度も経験しました。ボールペンで書いてある自己推薦書に誤字脱字が見つかることもありました。しつこいですが前日の夕方に、ですよ。これ、君が先生ならどうします？

大切な書類はゆっくり時間をかけて作るべきですが、提出後に万が一ミスがあった場合のことを考えて作成しなくてははいけません。慎重に考えた結果、期限の初日に提出すると決めた生徒は、すでに心構えが慎重ですからミスが少ないのですね。

今週のおすすめ

・中島義道 『私の嫌いな 10 の言葉』 （新潮文庫）

この人のカントの時間論。ただの哲学者ではなく「戦う哲学者」として有名になったのは『うるさい日本の私』を出版したからでしょうね。これは面白い本でした。デパートに行けば一日中「エスカレーターのお乗りの際は…」と、これは一種の騒音であるから被害者である我々は断固立ち上がるべし、という主張です。さらに、とりあえず私が立ち上がって見せましょと、「そのアナウンスをやめなさい！」とデパート側に掛け合うわけですね。私だって言っていることには賛成ですが行動はしません。中島さんはすごいですよ。だからこんな本も書けるのですね。やり玉に挙がっている言葉は「相手の気持ちを考えろよ！」、「ひとりで生きてるんじゃないからな！」、「おまえのためを思って言っているんだぞ！」、「もっと素直になれよ！」、「一度頭を下げれば済むことじゃないか！」、「謝れよ！」、「弁解するな！」、「胸に手を当ててよく考えてみろ！」、「みんなが厭な気分になるんじゃないか！」、「自分の好きなことがかならず何かあるはずだ！」です。以前『私の嫌いな 10 の人びと』を紹介しましたが、今回も中島さんの「生きにくさ」全開です。ちなみに、他に『男が嫌いな女の 10 の言葉』がありますが、これを読んだ女性はアンチ中島になるでしょうね、絶対。

BGMは ZARD の 揺れる想い でした…。